

あゆみ通信

VOL. 108

あゆみの会(真宗大谷
派大阪教区第2組同朋
の会推進員連絡協議会)
会長 浪花 博
広報 本持 喜康

2018年第2組聞法 会講師陣 決まる

第2組の仏事の柱である「共に真宗に聞く会」の2018年の講師陣が決まりました。

5月12日(土) 新田修已先生①

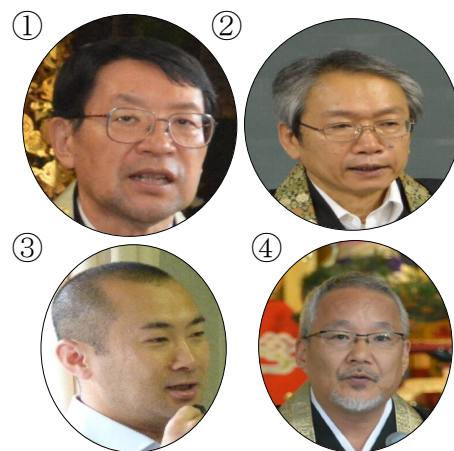
6月12日(火) 松山正澄先生②

7月12日(木) 新田修已先生

8月25日(土) 稲垣直来先生③

9月12日(水) 新田修已先生

10月20日(土) 三好泰紹先生④



胆(きも)に銘ず
親鸞聖人が書かれた「一念多念文意」に、こんな言葉がある。「凡夫というは無明煩惱われらが身にみちみちて、欲もおおく、いかり、はらだち、ねたむころおおく、ひまなくして臨終の一念にいたるまでとどまらず、きえず、たえずと水火二河のたとえにあらわれたり」

自身のことを、こんなにはつきり整理されてるのを、読むたびに、心がうずくのである。少しの聞法だけで、分かったつもりになってはいけません。たえず、立ち止まって、自身を問いなさい。と、おっしゃられている気がして、何かをするたびに、問い尋ねることにしていることである。(本)

12/17(日) あゆみの会総会で

2017年10月9日(祝月) 東本願寺で、第4期第2組の推進員養成講座「共に真宗に聞く会」が終わったところで、こう考えた。あゆみの会は本山で学んだ仲間の同窓会の場であり、お寺という垣根を超えた、共に一念仏の道を歩む会である。

2008年12月、第2組に組推協「あゆみの会」が誕生した。それまで推進員は沢山おられたものの組織化には至らなかった。以後10数年に渡り推進員の教習は、残念ながら第2組では無かったということである。2011年の親鸞聖人750回御遠忌を迎える前段で、第2期第2組推進員養成講座が、第2組の総力を挙げて取り組まれ、6カ寺の18名が本山で修了を迎えた。そして、「縁あって一緒に本山で学んだ我々が、これで解散はもったいないから、同窓会をしよう」という、声が出て、それがあゆみの会結成の足掛かりとなった。そこには当時の組長、副組長さんや、とりわけ発足当時の指導に当たってくださった即應寺の藤井善隆住職をはじめ、スタッフの皆さんの支えとご支援があって誕生で来たことである。しかも、第2組では歴代の組長、副組長さんが、あゆみの会の結成から運営までを、

推進員に任せていただいた事である。そこに、組織づくりを、経験豊かな世話人同士が意見を出し合い、役割を分担して今日を迎えることになったということである。

以後、2013年には第3期養成講座が開催されて8カ寺の18名が修了され、2017年には第4期養成講座が開催されて4カ寺10名が修了された。

この中から、あゆみの会へ参加をしていただいて、現在は38名の会員となっている。

しかし、10年近くが過ぎて、年齢も当時から10歳を数え、体調や家庭の事情などで、参加が出来ない会員も増えて来たことを、これからどうつなげていくかが力ギとなろう。

皆で「共に学び共に歩む一念仏の道」を、目指したい。総会で、集まって同窓会をやるうではありませんか。

あゆみの会総会案内

日時 2017年12月17日(日)
午後2時から

会場 了安寺(天王寺区生玉寺町)

内容 総会(事業報告、事業計画、会計報告、予算案、監査報告、役員選出)

法話 講師 王来王家純也駐在教導。懇親会

参加費 2000円(お斎料込)

年会費2000円も受付ます。

第2組報恩講厳修

2017年11月14日(火) 午後5時30

分から即應寺(藤井善隆住職)で、第2組合同の報恩講が、組内の住職や寺族に門徒、推進員42名が参加して厳修された。松本隆信副組長(西教寺)の進行で開会、朋友会を中心に全員で勤行が行われた。

続いて、19組了信寺前住職の高間重光先生から「親鸞聖人といなかのひとびと」を講題にお話をいただいた。(要約は別項参照) 終了後、恩徳讃斉唱し、休憩のあと、お齋をいただきながら歓談。そして



半ば過ぎから岸野龍之住職(稱念寺)の司会で同朋総会が開催され、法話の感想や第2組に対する要望、教区出版物への要望など、活発な意見が出され、門徒会中嶋ひろみ会長による挨拶をいただき閉会した。

高間重光先生の法話をお聞きして

浪花 博

(法山寺)



先ずはじめに、報恩講の由来についてお話がありました。関東での布教20年で、関東のご門徒衆の親鸞聖人への思いが強く、①京都での生活を金銭的に支えられた②門徒たちの手紙を携え30日から40日かけて、代



表が再三聖人を訪ねられ、それに対して聖人は手紙をしたためられた③聖人が亡くなった後も、ご命日には代表者がお墓に参られた。これが報恩講の始まりであると言われていると話されました。

続いて本題として「唯信鈔文意」についてお話がありました。「唯信鈔」は、聖覚法印(法然上人の直弟子で、親鸞聖人の兄弟子)が記されたものですが、親鸞聖人78歳の時にひらがなで、わかりやすく注釈をつけた文意を記し、「いなかのひとびとの文字の



こころもしらず、あさましき愚痴きわまりなきゆえに、やすくこころさせんとて・・・しるせるなり」(「唯信鈔文意」と、弥陀の本願はみな往生することをいなかの人々に伝えたいためであります。

鈴木大拙先生によると、日本人の本当の宗教的意識は、鎌倉時代に生まれたと言われています。大地に立つ生活者、大地に這ういなかの人々によって、念仏の教えは受け取られ、伝わってきました。平安時代までは、貴族や権力者のため

の宗教で、大地を踏んでいる宗教ではなかったのです。

鈴木大拙先生は「仏法を賜るということは、生活の中で歩みが始まることであり、

生活の中で問いを持つことである」とおっしゃっています。要は大地に身を置く人々にこそ念仏は伝わって行くのでありますと話されました。

私どもは、浮草のような生活をしていますが、大地に這ういなかの人々に願われた親鸞聖人の教えを、自分の身にいただく聞法に励まねばならないと、心を新たにしました次第です。終わり。

(鈴木大拙先生 1870年石川県金沢市生まれ。1891年今北洪川に参禅。1921年真宗大谷大学教授。

「教行信証」英訳を手掛け、完成。1966年逝去。)

*今回も浪花博会長に感想をまとめていただき、掲載させていただくことが出来たことに感謝。



ひとすじに

おろかなるものを。

こころえたすからんとて、

しるせるなり

愚禿親鸞